

2020 年度

ダイアログ・イン・サイレンス

小学校開催アンケート結果報告書

2021 年 5 月

一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ

目次

1. 実施概要

2. 効果測定実施

2－1. 3割の児童の自己肯定感が向上、自己効力感を示す数値も向上した。

2－2. 異文化、特徴の異なる人々への関心の高まりがみられた。

2－3. 障害者に対する印象が好意的に変化した。

2－4. 本調査で得られた他の知見

3. フリーアンサーから見えた傾向

3－1. 手話を学びたいという記述が多数集まった。

3－2. 障害者、耳の聞こえない人に対する考えが変わった。

3－3. その他

4. まとめ

参考文献

写真

1. 実施概要

実施校：3校

1) 調布市立飛田給小学校

日程：2020年10月19日（月）10：45～12：20 3時限／4時限目

対象：4年生 2クラス 合計72名

2) 新宿区立花園小学校

日程：2020年10月26日（月）10：45～12：20 3時限／4時限目

対象：4年生 1クラス 24名

3) 杉並区立杉並第七小学校

日程：2021年3月11日 木 13：45～15：20 5時限／6時限目

対象：3年生 2クラス 合計61名

体験した児童数 合計157名

ダイアログ・イン・サイレンスとは

音のない世界で、言葉の壁を越えた対話を楽しむエンターテインメント。音声に頼らずに対話をする達人である聴覚障害者のアテンドとともにプログラムは進み、音声言語、視覚言語に頼らないコミュニケーションを体感できる。2017年に日本で初開催、2020年8月よりダイアログ・ミュージアム「対話の森®」にて常設開催。プログラム中は参加者全員がヘッドセットを装着し、音声言語、視覚言語（手話）を使わずに、表情やジェスチャーなどの非言語コミュニケーションによる対話を楽しむ。

小学校開催プログラムではヘッドセットを使用せず、内容を再構成している。

小学校開催プログラムの流れ

- ①（全体）体育館に集合、挨拶、聴覚障害アテンドの紹介、導入
- ②（グループアクティビティ）エアーキャッチボール：アイコンタクトに慣れ、アイコンタクトだけでも伝わるものがあることを知る。
- ③（グループアクティビティ）手のサイン：さまざまな手の形やジェスチャーで表現することの楽しさ、声を出さずに遊ぶ楽しさを発見する。
- ④休憩
- ⑤（グループアクティビティ）給食：食べ物のイラストやジェスチャー、簡単な手話を用いて、音声言語でない表現に触れ、表現の幅を広げる。異なる文化を持つ人とのコミュニケーション方法を見つける。

※飛田給小学校、花園小学校：プログラム終了後、聴覚障害アテンドと児童と一緒に給食を食べ、プログラムで楽しんだ音のないコミュニケーションを存分に活かし、昼食を楽しんだ。

2. 効果測定実施

「ダイアログ・イン・サイレンス」の体験児童に対してアンケートを実施。同じ設問項目に対する数値比較を検証した。

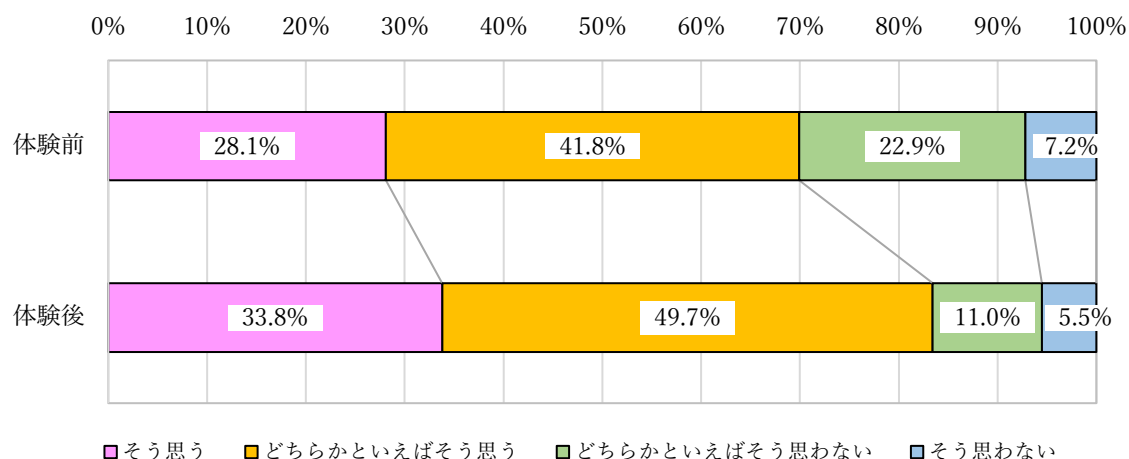
2-1. 3割の児童の自己肯定感が向上、自己効力感を示す数値も向上した。

アンケート項目「自分自身にまんぞくしている。」について、そう思う・どちらかといえばそう思うと答えた児童の割合は体験前で 69.9%、体験後で 83.5%と、13.6 ポイントの増加が見られた（グラフ1）。

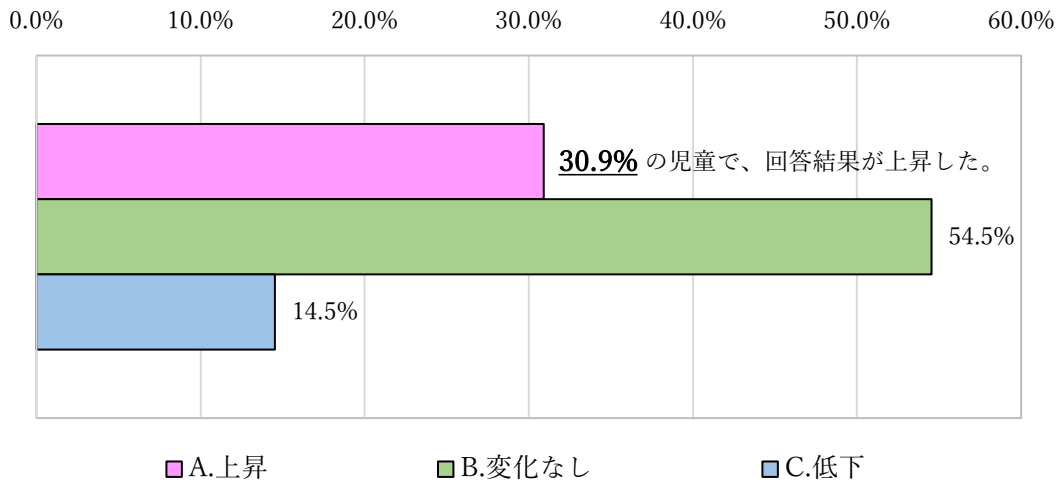
これについてグラフ2では、各児童が選択した回答を体験前後で比較し、自己肯定感の程度の変化を調べた。回答が自己肯定感上昇の方向に変化した（例えば体験前に「そう思わない」を選択し、体験後に「そう思う」を選択したなどの）児童の割合を「A.上昇」、体験の前後で回答内容が変化しなかった児童の割合を「B.変化なし」、回答が自己肯定感低下の方向に変化した児童の割合を「C.低下」とし、3つに分類した。すると、体験した児童のうちの3割の児童で、自己肯定感が向上したことがわかった。調査対象の年齢層が異なるものの、日本の若者の自己肯定感は諸外国に比べ低いことが知られているが[参考文献1]、本プログラムはそれを克服する一助となる可能性が示された。

また、アンケート項目「自分のきぼうはいつかかなうと思う。」については、そう思う・どちらかといえばそう思うと答えた児童の割合は体験の前後で 3.3 ポイント増加した（グラフ3）。上記のことを踏まえると、本プログラムが体験児童の自己肯定感、そして自己効力感（自分自身の可能性の認知）を高めるという結果が示された。

グラフ1. 自分自身にまんぞくしている（全体の割合）



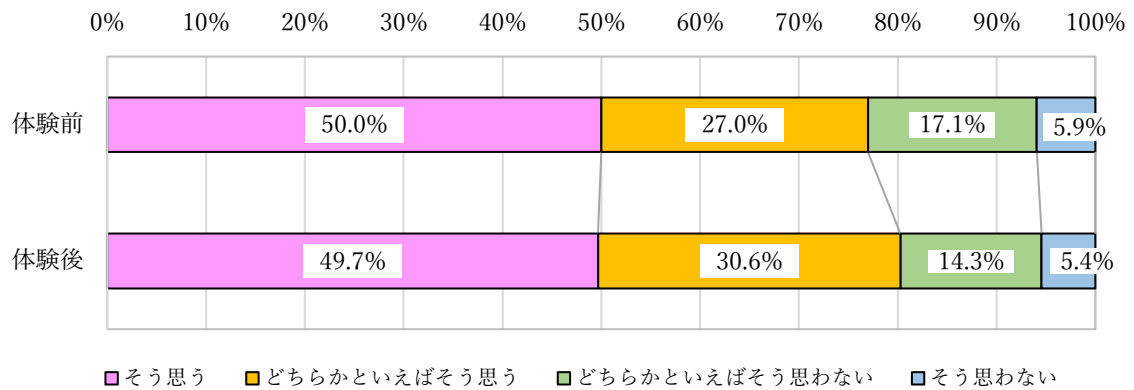
グラフ 2. 自分自身にまんぞくしている（体験前後の比較）



各児童について、体験前後の回答結果を比較した。

例えば体験前に「そう思わない」、体験後に「そう思う」を選択した児童の場合、「A.改善」にカウントした。

グラフ 3. 自分のきぼうはいつかなうと思う。

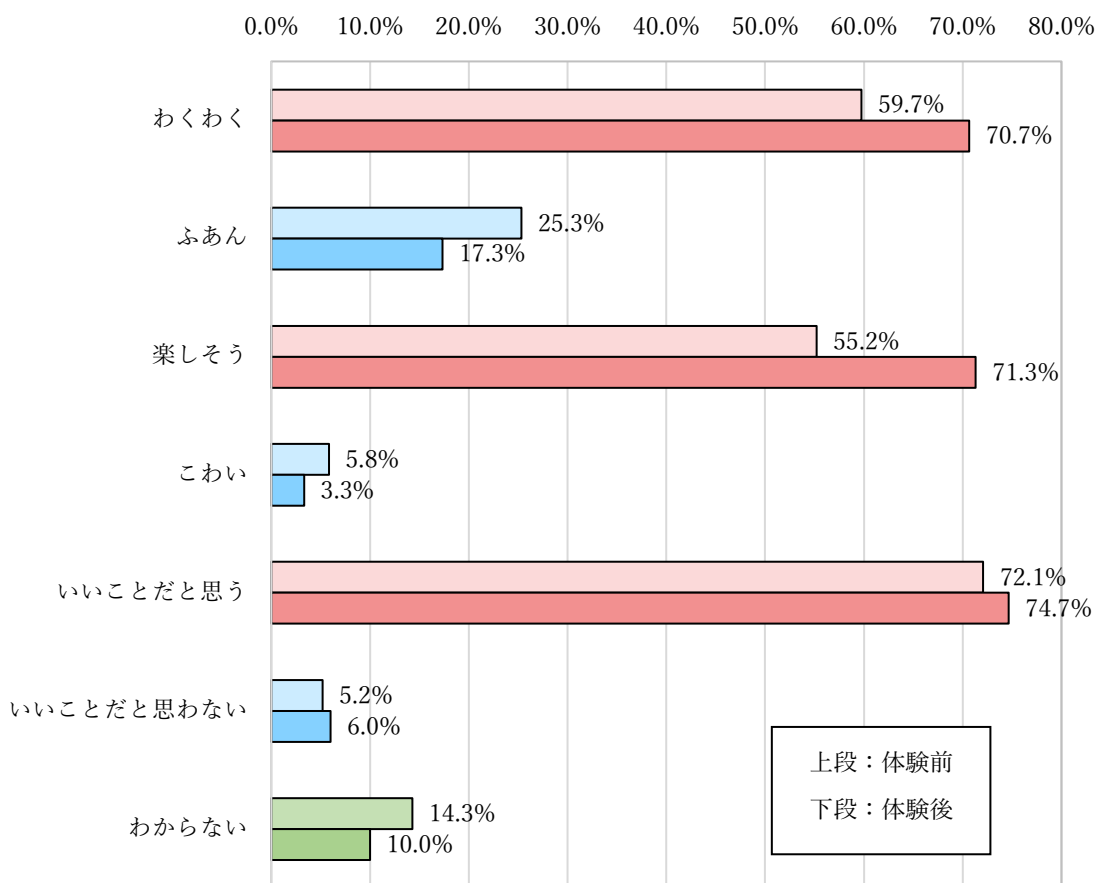


そう思う・どちらかといえばそう思うと答えた児童の割合が、
体験前の 77.0%から体験後の 80.3%で 3.3 ポイント増加した。

2-2. 異文化、特徴の異なる人々への関心の高まりがみられた。

アンケート項目「自分たちとは文化やとくちょうがちがう人たちとふれあうことについて、あなたはどのように思いますか」に対し、あてはまるものを選択してもらった。その結果、体験の前後で「ふあん」や「こわい」というネガティブな項目のポイントが減少し、「わくわく」「楽しそう」「いいことだと思う」というポジティブな項目のポイントが増加した。聴覚障害者であるアテンドスタッフとの交流を通して、異文化、多様な人々への関心が高まったといえる。

グラフ3. 自分たちとは文化やとくちょうがちがう人たちとふれあうことについて、あなたはどのように思いますか。

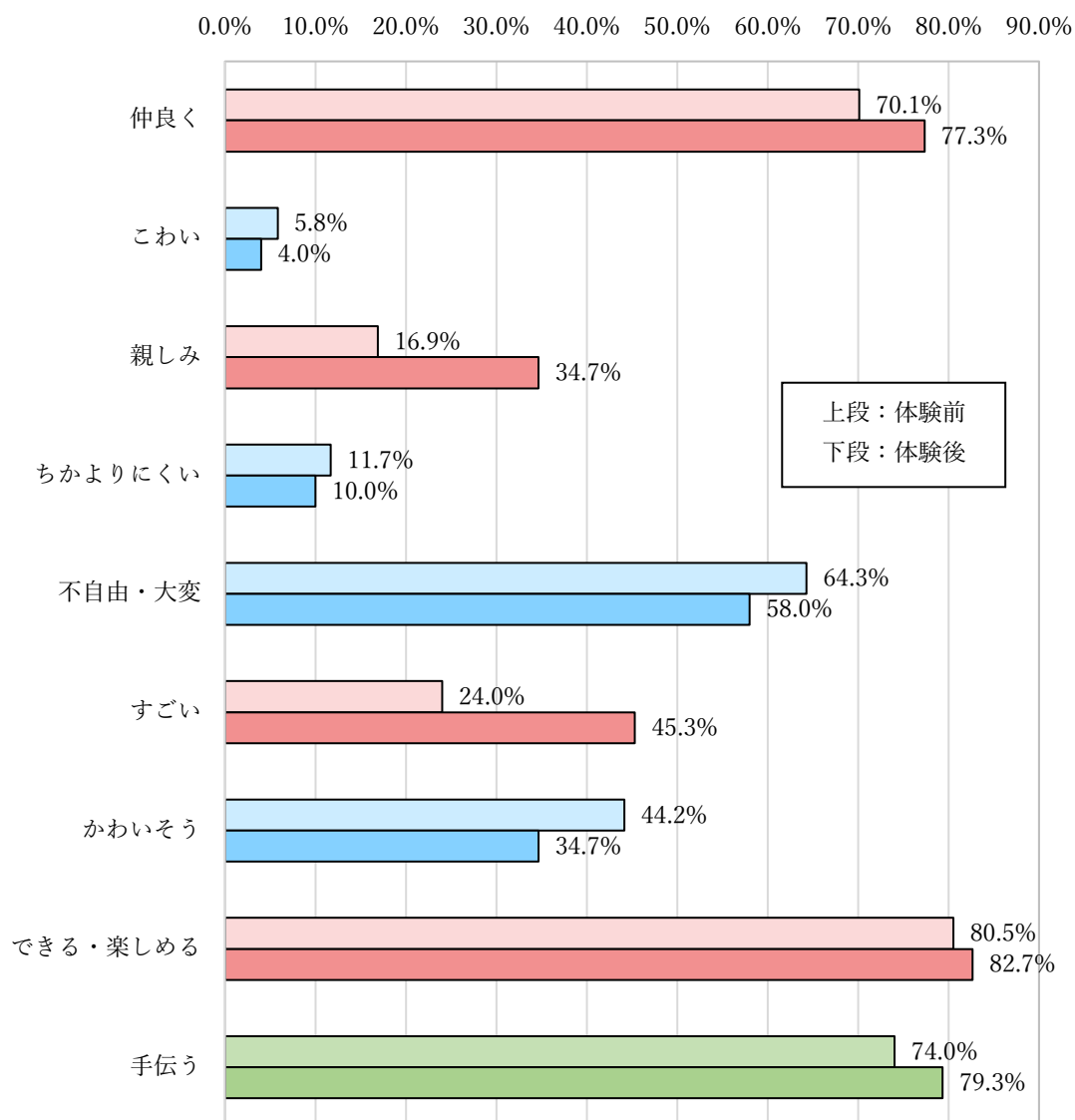


「わくわく」と回答した児童の割合は体験の前後で 11.0 ポイント、「楽しそう」と回答した児童の割合は 16.1 ポイント増加した。

2-3. 障害者に対する印象が好意的に変化した。

アンケート項目「障がいのある人について、どのように感じていますか。」に対して、当てはまるものを選択してもらった。「仲良く」「親しみ」「できる・楽しめる」などポジティブな項目のポイントが増加した。対照的に、「こわい」「ちかよりにくい」「かわいそう」などネガティブな項目のポイントが減少した。

グラフ4. 障がいのある人について、どのように感じていますか。



2-4. 本調査で得られた他の知見

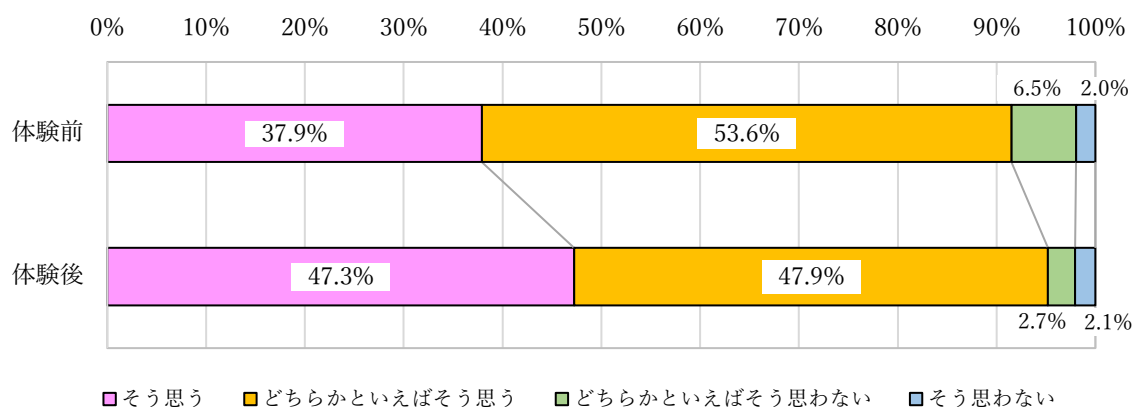
上記のほかに「人のことがしんらいできると思う。」「相手のよろこぶことをしてあげたくなる。」「相手がよろこんでいると自分もうれしくなる。」「どうすれば相手によろこんでもらえるかを考えたい。」の4つの設問についてもアンケート調査を実施し、グラフ5～8のような結果を得た。

グラフ6～8「相手のよろこぶことをしてあげたくなる。」「相手がよろこんでいると自分もうれしくなる。」「どうすれば相手によろこんでもらえるかを考えたい。」について、そう思う・どちらかといえばそう思うと回答した児童の割合は、体験前後で微増あるいは減少となった。これらの3項目は、私立白鷗中学校3年生を対象に実施したプログラムでスコアが上昇した項目と完全に一致している（別冊「2020年度 異文化を体感しにくいコロナ禍における新たなダイバーシティ教育プログラム（視覚障害者との交流・対話プログラム）アンケート結果報告書」6-7ページを参照）。これらのことより、聴覚障害スタッフにより進行される本プログラム、そして視覚障害スタッフにより進行されるプログラムの両方を体験することで、児童や生徒がそれぞれのプログラムから異なる学び、異なる効果を享受しうることが期待される。

※1 ダイアログ・イン・ザ・ダーク

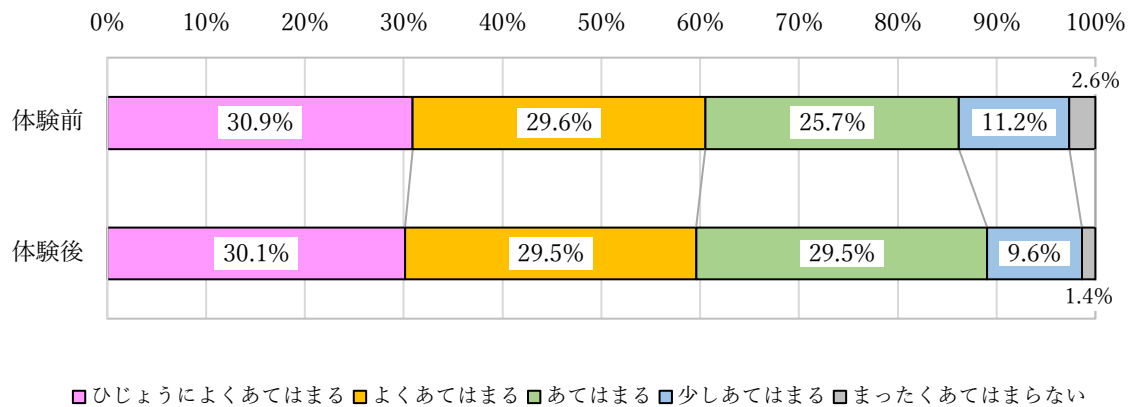
純度100%の真っ暗闇の中で、見ることを除く感覚を使い、驚きに満ちた発見をしていくエンターテイメント。体験を案内するのは、普段から目をつかわない視覚障害者のアテンド。視覚以外の感覚を広げ、新しい感性を使い、チームとなった方々と様々なシーンを体験する。1988年、ドイツの哲学博士アンドレアス・ハイネッケの発案によって生まれ、これまで世界50か国以上、800万人以上が体験。日本では1999年に初開催し、これまで23万人以上が体験した。

グラフ5. 人のことがしんらいできると思う。

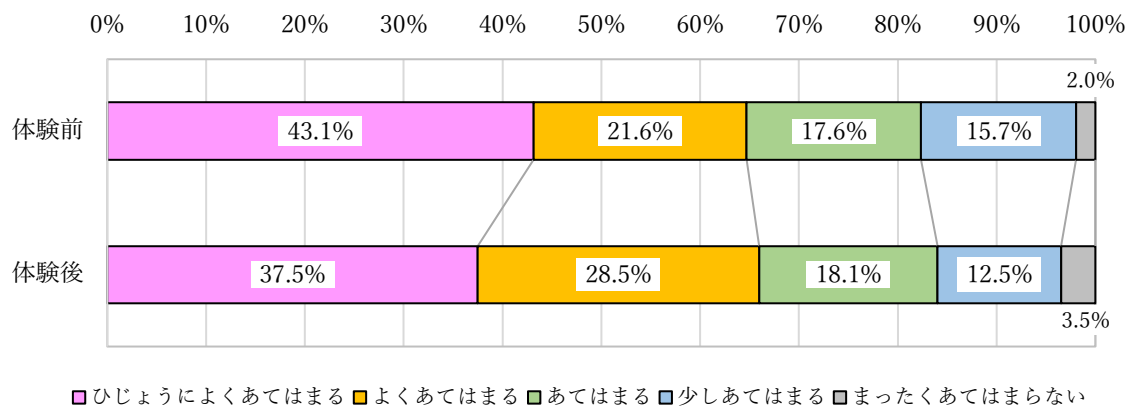


そう思う・どちらかといえばそう思うと答えた児童の割合が、
体験前の 91.5%から体験後の 95.2%で 3.7 ポイント増加した。

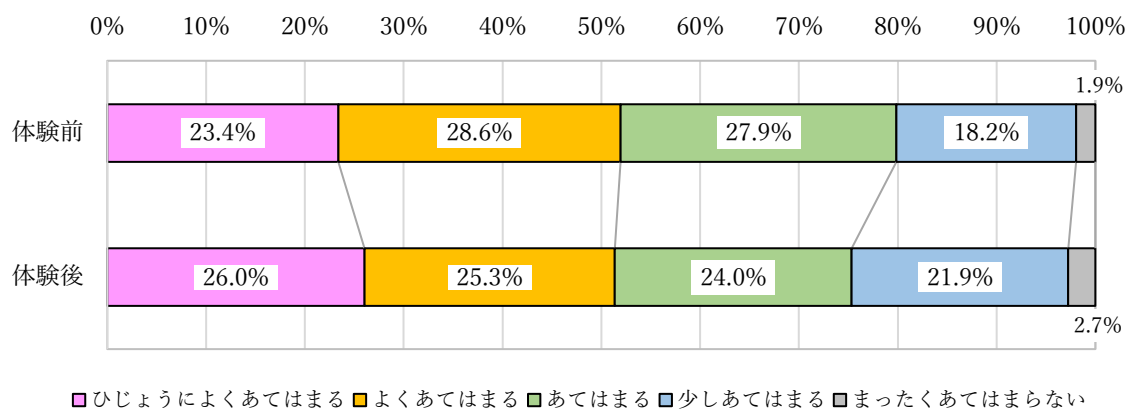
グラフ 6. 相手のよろこぶことをしてあげたくなる。



グラフ 7. 相手がよろこんでいると自分もうれしくなる。



グラフ 8. どうすれば相手によろこんでもらえるかを考えたい。



3. フリーアンサーから見た傾向

児童らには、体験後のアンケート項目として以下の4つの質問にフリーアンサー形式で回答してもらった。ここでは集まった回答から見える傾向について、一部回答を抜粋しつつまとめた。

【体験後アンケート／フリーアンサーの質問項目】

・ダイアログ・イン・サイレンスを体験して楽しかったこと、嬉しかったこと、良かったことがあれば教えてください。

・ダイアログ・イン・サイレンスを体験したことで、何か考えが変わったことはありますか？

(考えがかわったことがある、何も考えは変わっていないの2つから選択(グラフ6参照)／自由記述項目として「何がどんなふうになりましたか?」を記載)

・ダイアログ・イン・サイレンスを体験したことで、これからやってみようと思うことはありますか？

・一緒に遊んだ聴覚に障がいがあるアテンド達に伝えたいことがあれば書いてください。

3-1. 手話を学びたいという記述が多数集まった。

手話を知りたい、耳の聞こえない人ともっと話したいから手話を学びたいという声が多数寄せられた。このことから、国内に現存する少数言語の1つとして日本手話が学校で扱われた際には、児童や生徒らが意欲的に学習に取り組むことが予想される[参考文献2]。

以下、実際の回答の一部を原文のまま掲載した。

【これからやってみようと思うことはあるかという】

- 耳が聞こえない人でも、手話ではなしてみたいから、手話をおぼえたい。
- 手話をおぼえて耳が聞こえない人とお話したい。
- しゅ話で、耳の聞こえない人と友だちになりたい。
- いろいろな手話を知って、聴覚障害がある人といっぱい話してみたい
- しゅわをもっとおぼえて、しょうがいのある人とはなしたい
- ほかに耳のきこえない人にしゅわをすればつうじるからそうしてみたい。
- もし、耳が聞こえない人に会ったりしたら今日やった手話を使ってあいさつをしたいなと思いました。
- 耳をきこえない人にしゅわをつかってはなしてみたい
- 知らない耳の悪い人に手話で話しかけてみたい
- 耳の聞こえない人とかしょうがいをもっている人にいつでもたいおうできるように手話とかいろいろしっておきたいです。

- 耳が聞こえない人といろいろな場面で会ったりアテンドの人に会ったらちょっと話してみたいです。
- たくさんの手話を知りたくなったので、手話の本を使って調べてみたいと思いました。
- 手話で話せるようになりたいです
- 手話を習ってみようと思いました。
- しゅわをならおうと思った
- もっといろいろな手話を覚えたい 手助けする
- 手話をならいたい。
- 手話のやり方をもっといっぱいしりたい
- 手話をおぼえる。大切な。
- しゅわをもっとみたい
- 手話をたくさん勉強したい、と思いました。
- 手話を使いたい。
- しゅわをもっとしること
- 手話をもっとおぼえたい
- 手話をもっとしりたい
- もっとしゅわをおぼえたい。
- 手話を、がんばって、おぼえる。
- 手話の勉強を続けたい
- 友だちや家族と手話で話してみたいです！

3-2. 障害者、耳の聞こえない人に対する考えが変わった。

障害者と関わることに不安を感じていたが不安ではなくなった、耳の聞こえない人とはあまり話しができないと思っていたが考えがかわったなど、障害者や耳の聞こえない人に対する印象の変化を記す記述が多く見られた。

【どんなふうに考えがかわったかという質問に対して】

- ちょっとかかわりずらいかとおもっていたのがかかわりやすくなった。
- しょうがいがある人は、すこし不安だったけど不安ではなくなった。
- しょうがいのある人とふれあうのはふわんだったけど、今で親しみを感じた
- 障害者にはなしかけるのは不安だったけど、明るい人たちだったので（アテンドさんが）話しかけやすくなった
- 耳が聞こえないと、他の人とはちがってたいへんだと思ったけど、今日体験してジェスチャーなどでみんなと楽しさを伝え合うことができみんな同じだと思いました。
- 最初の考えは大変なんじゃないかなと思ってた 障がいがある人はつらいと思って

いたけれど、障がいがあるからこそできることがあると考えがかわった。

- 障害のある人はわるいことではなくすごいこと（人）
- 耳が聞こえない人は相手が言いたいことを理解するのに時間がかかると思っていたが、すぐに分かってくれた。
- 耳が聞こえない人は楽しいこともたくさんあるよっかたと思う。
- 耳が聞こえなくても、ちゃんと手話で話ができる
- 耳が聞こえなくてもしゅわをつかわないでかんたんに思いを伝えられる
- 耳のふじゆうな人でも手でおしゃべりができる。
- 耳が聞こえない人でもひょうじょうや手話を使ってできることがあるんだなぁと思いました。
- 今まででは耳が聞こえない人とはあんまり話ができなとおもっていたけど、体験したことで、手とかを使えば話せるということが考えがかわった 大変だとおもっていた手話も、やってみれば 楽しかったし、どうじに、ちょうかくしょうがいの方へも好感が持てた

➤

3－3. その他

- 人はしんじられる。
- 耳にしょう害がある人の見かたをみんなに変えてほしい
- 声を出さずにおしゃべりが出来るようになった。
- ダイアログ・イン・サイレンスをやるまでは、しゃべらないと通じないと思っていたけれど、しゃべらなくても相手に気持ちが伝わるんだなと思いました。
- 相手の目を見れば、耳の聞こえない人でも、会話ができる
- 耳が聞こえなくてもみんなみたいに人だからやさしくしてあげる
- だれかが話している時に目をあわせること
- またあいたい
- またきてね
- またできたらお会いしたいです。それでまた手話をおしえてください。本当はとしはなん才かききたかったです。

4. まとめ

本プログラムの体験により、3割の児童での自己肯定感の向上が見られた。日本の若者は諸外国に比べ自己肯定感が低いことで知られていることを踏まえると、小学校で本プログラムを開催することの意義は大きい。また、プログラムにより児童らは、さまざまな特性や障害、異なる文化を持つ人々との交流に対して意欲を高めることが示唆された。2030年に世界が目指すSDGs目標「誰一人取り残さない社会」実現への近道となることが期待される。

参考文献

1. 内閣府，令和元年度 子供・若者白書（概要版），特集1 日本の若者意識の現状～国際比較からみえてくるもの～，
https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01gaiyou/s0_1.html
2. 松岡 和美・前川 和美・下谷 奈津子，2018，大学における日本手話クラスの現状と課題 ―マイノリティの言語と文化への理解を促す授業―，『複言語・多言語教育研究』 日本外国語教育推進機構会誌 No.6 (2018) pp.60-71

写真

